

ヴィルヘルム・ラーベ作

薬局 ヴィルデマン (二)

門 間 俊 明 訳

第 四 章

「親愛なる友人であり隣人でもある皆さん」森林監督官ウレボイレの意見によれば、この村でひとかどの事をやり遂げた人物、つまり少なからぬ財を成した人物はこう語りだした。「実は皆さんが今日こちらにいらつしやる前、私は昔の思い出にひかされて、調剤室にある文書箱を二度ばかり開いては、長い間に積もったほこりを吹き落としたのでした。そこから一揃いの証拠書類を取り出して、ここで皆さんにご披露しようと思います。私の運命は摩訶不思議な謎に満ちているにもかかわらず、この書類の上に、分かりやすく、きちんと記されています。たとえば私が日記のようなものをつけていたというわけではありません。それはまぎれもない公式の文書で、皆さんには後で手ずからご確認いただくことになりました。」

私の父は、私に数千ターラーの財産を遺してくれました。しかし

私の後見人は、親切なお人好しではありましたが、すこぶる軽率で、大ざっぱな性格の人でした。彼は私の財産をいい加減に運用したのです。私が自分でお金を使ってもいい年齢に達したときには、お金はあらかた消え去ってしまいました。後見人は泣きながら私に打ち明けました。一体どこへ行ってしまったのか、自分にも覚えがないというのです。気休めにでもなると思ったのでしょうか、彼がさらに付け加えたところによれば、彼自身の財産状態も同じようなものだということでした。かなりの高齢だったこの人物には、やはりもう若いとは言えない三人の未婚の娘がおり、三人とも私の仲の良い友達でした。私に残されたことはといえば、彼らと一緒に涙を流し、お互いの愛情と思いやりで過酷な現実を少しでも耐え易いものにするということだけでした。親切な三人の娘たちは、私の衣類やその他必要な品々を取りそろえ、行李に詰めてくれました。こうして私は見習い期間を終えて、先行きどう転んでも万年徒弟で終わるだろう

ぐらいの気持ちで、薬局の調剤助手の生活に入りました。それから五年か六年のあいだ、薬の甘さ、酸っぱさを嗅ぎ分けたり、伝染病に取り組んだり、真夜中にたたき起されたり、医者之家に使い走りしたり、そんなこんなで各地を転々としました。そしてとうとう私は、愛するヨハンネと巡り会った〇〇〇町にやってきたのです。ですからウレボイレさん、私が本当にひとかどのことをやり遂げたのは、つまり私の人生の中で唯一充実した、幸福な日々を送ることができたのは、他ならぬあの町でのことだったのです」

「それについてもお祝い申しあげます」と森林監督官は口ごもった。

「こうして私は、人生のうちでも幸福な時期をむかえました。まるまる一年の間ではありましたが、やることなすこと歯車が噛み合いはじめたのです。

あらゆる点で私はついていました。当時の親方は一風変わった偏屈者の老人でしたが、この人物についてはもう少し詳しくお話ししなければなりません。私との関係からしても、彼自身の人柄からしても、あらゆる意味で彼はここでお話しするに値する人物だからです。彼はもちろん思いやりを持った薬剤師ではありませんが、幾分か気違いじみた熱狂者、高尚な学問、植物学の熱狂者でした。そして実際のところ、著名な植物学者だったのです。事情が許すかぎり、第一助手や見習いに調剤室を任せ、彼自身は森や野原で自分の好き

な研究に没頭していました。しかし、私が彼の家に雇われたときには事情が変わりはじめました。齢六十歳を越えてしだいに彼の目は弱りはじめ、背中がまがらなくなってきたのです。山や谷間で見つけた植物にかがみ込んだはいいものの、呻き声を上げ、いまいまげに腰に手を当てなければ立ち上がれないような有様でした。私が彼の門を叩いたとき、彼は私に植物学の試験を行いました。この上なく難しい試験でしたが、幸いにも結果は上々でした。この試験をきっかけにして、彼のもとでの私の立場は上向き始めました。試験結果に満足してくれたのでしよう、その後彼は私にシユテーパーの書いたカール・リンネの伝記を一冊くれました。さらに彼は、我々の『女神』に身を捧げた人々について語り、一七世紀最大の植物学の天才、シャルル・ド・レクリューズ、ラテン名カロルス・クルシウスをお手本にするよう勧めました。ネーデルラントのアラス出身のこの人物は、植物学に携わるうちに二四歳で水腫症にかかり、三九歳のときには、スペインで馬ごと地面に叩き付けられて腕の骨を折り、さらに傷が癒えた直後には右足の太ももを骨折したのです。五五歳の時にはウイーンで左足の骨を折り、八年後には右の腰の骨を外しました。ひき続き彼は杖をたよりに歩き回り、さらにヘルニアと結石痛の病を得たにもかかわらず、あの驚嘆すべき書物、『稀観植物の自然史』を書き上げたのです。自らが生きて活動した暗黒の世紀から、彼は栄光に満ちた光明として、後の時代を照らし出し

たのです。さて、私の親方はその後、本草学を習得させるべく実地に私を野に送り出しました。彼自身は家にとどまり、実務を司るかたわら、所有する植物学の本を読んで時を過ごしました。これらの本は、それ自身非常に珍しいものだったのですが、彼が亡くなった後にはゴミ同然に捨てられてしまいました。私は彼のかわりに、ほとんど季節を問わず野山を走り回らねばなりません。なぜなら、彼は蘚苔類についても造詣が深かったからです。しかし、それ以外の植物が目もあやに咲き誇る数ヶ月がくると、私はほとんど毎日、何マイルも離れた野や山に出かけては珍しい植物を探しまわりました。その当時の彼は、そうやって私が集めた植物を自分のものにおき、詳しく研究することにし心血を注ぐことができなかつたのです。——本当にそれは素晴らしい日々でした。あれからも何十年も経ちますが、あの時ほど幸福な毎日が次から次へとめぐってくるのを、私は未だかつて経験したことはありません。おまけにすでにお話ししたとおり、高い山、日のある斜面、あるいはまた薄暗い谷間であろうとも、私はじきに婚約者の名前と面影を胸に抱いて歩き回るようになりました。ですから、あの当時に大地に降りそそいだ日の光は、今になっても何ものにも比べ難いほど貴重なものに見えるのです。だからといって私が、日の光に耀きわたった山の上で有頂天のあまりとんぼ返りをしていたというつもりはありません。むしろその逆だったのです。人生の歓喜の中には、いつも一筋

の不安が紛れ込んでいました。慣れ親しんだ森の中から、せせこましいあの小さな町に、人の数は少ないとはいえ、ごった返すあの雑踏と口やかましい混乱の中に再び戻ってきたときには、しばしばとても不安な気持ちになるのです」

「それは誰だってそうですよ。特に野に出て仕事をする機会の多い人はね。私だってそうですよ」と、森林監督官は言った。

「しかしまだしばらくは」と、語り手は話の腰を折られたの意に介する様子もなく話し続けた。「まだしばらくの間は、私にとつて野山を駆け回るその瞬間こそが全てでした。ところが徐々に、徐々にではありましたが、ふもとの町での将来の生活、やっかいな、不安に満ちた、霧に閉ざされた将来の問題が心を領しはじめたのです。

お前と、お前の愛するあの娘は、一体これから先どうやって暮らしていっていいのか。

あの町に住んで二年目に、ひどい憂鬱症に襲われたことについては、すでにお話ししました。陰気な、不安な思いは、最初はいつも町の古い城壁の中に留まって、郊外の遠出にまでついてくることはありませんでした。しかしやがてそれは、人里離れた郊外にまでつきまといはじめ、どんどん私を追いかけてくるのです。とうとう三度目の春には、得体の知れぬ指先が行く先々で私を脅かすようになりました。親方は私が恐ろしくやせてきたと言ひ、私の身を案じて、在庫部屋にあるいろいろな神経に効く葉や健胃薬を飲むように勧め

てくれました。

しかしどんな薬を飲んでも、もとの健康体に戻ることはできませんでした。ヒポコンデリーと快活な気分との間を行ったり来たりしながら、それでも私は野を歩き回りました。そしてとうとう、私を助けてくれたあの男に出会ったのです。

親愛なるみなさん、私はちょうどその年の夏にあの男に出会いました。本当に風変わりな、謎に満ちた、ヨハンネに言わせれば、本来不気味とも思える出会いでした。私が今こうして薬局ヴァイルデマンの主人でいられるのも、あの巡り合わせのおかげなのです。そしてあの出会いは、三十年以上経った今になっても相変わらず解き明かされぬ謎、私の人生の神秘のままなのです」

「聞かせてください、ぜひ聞かせてください」牧師は、息もつかせず物語のやま場を話し続ける語り手を、張りつめすぎた緊張感のあまり思わずさえぎって、息せききってこう叫んだ。フィリップ・クリステラー氏は、物語を続ける前に、この機会を使って一息ついた。

しかし彼は実際のところ、心に秘めた自分の人生の秘密を打ち明けたがっているようにさえ見えた。彼は続けて話した。

「なんのことはない、私は一人の山歩きの同行者、いくなれば、若くて身なりのきちんとした一人の仕事仲間を見つけたのです。彼もやはり植物学を研究していました。私よりも少しばかり若いよう

に見えましたが、やがてひとかどの自然愛好家、ひとかどの植物通であることが明らかになりました。人を虜にしてやまないこの学問に対する、彼の理解力に満ちた探究心は、私の親方のそれをすら凌ぎました。彼はあの地方出身ではありませんでしたし、一度として彼から本当の名前を聞いたこともありませんでした。私たちはアウグストさんと呼んでいましたが、後にはただアウグストとだけ呼ぶようになりました。いずれにしてもそれは、彼の本当の名字ではなかったのです。

われわれ二人が七月のある日の暑い午後、まわりには花崗岩の塊がゴロゴロし、人の背丈ほどもあるジキタリスの茂みの生えた山の斜面、木の切り倒された、灼けつくような山の斜面で出くわしたのは全く偶然のことでした。私たちはすぐに同業者として親しく打ち解けましたが、その前にめいめいが丁寧に挨拶をかわし、お互いをまじまじと観察しあつたことはいまでもありません。この見知らぬ人物が、私を見てどう思ったかは分かりません。しかし彼の姿は、今になつてもなおあの当時のまま明瞭に、はっきりと私のまぶたに焼き付いています。すでに申しましたように、彼は私とほぼ同年代の若者で、背は高く、体格も立派でした。髪の毛は黒で、真面目そうな精悍な顔は少しばかり黄色がかっていましたが、けつして病的な色ではありませんでした。彼の頭は少しうなだれ気味で、声は心地よい響きを持っていました。しかし彼は、めつたにその美声を使

おうとはしませんでした。私たちが交際していた間じゅう、彼は会話の主導権を専ら私に任せたのです。それに、あなた方もご存知のように、私自身が常ににぎやかな、おしゃべりなおつきあいを好むたちで、時には少しばかり度を過ぎすこともありましたが――

ここで妹は、ひとこと言わずにはいられなかつたのだから、少しばかり不満げに言った。

「兄さんのおしゃべりについては、村の人たちがもう嫌というほど話の種にしていますわ」

牧師は微笑んだ。しかし森林監督官は、大声で笑いながらこう言った。

「ドレットさん、まさにそのとおり。彼の性格が待ち伏せ猟に全然適していないことは、私がもう二度も経験済みですからね。今度三度目の狩猟許可を求められても、ご一緒するのは御免被りたいもんです。きつねがこつちにやつて来たら、パーンと銃で撃つ前に一席きつねに演説をする、きつねとそんなところがおちでしようから。しかしあなたのお兄さんは、逆に駆り立てる猟にはもってこいでしょ。ウサギを追い立てる鳴子をやってもずいぶん重宝するにちがいない」

「あなたのご意見には心から感謝申し上げますわ、ウレボイレさん」と、老嬢は皮肉混じりに、ぞんざいに言った。ここでフィリップ・クリステラー氏は笑みを浮かべると、中断はこれぐらいにして

先を続けた。

「もちろんそうする以外に仕方がなかつたのですが、私は素直に自分の性格に従いました。私自身の人となり、私の人生、私の置かれた立場などについて、重要と思われることは全て、私は徐々にこの新しい知り合いに話していきました。しばらくすると、彼は私が生まれてからこのかたの出来事を、全て知り尽くすことになったのです。それに対して、私が彼から知り得たことは極々わずか、ほとんど皆無に等しいものでした。それでも彼は、私にとつては気のあつた話し相手でした。そして会うたびごとにますますその感は深まっていたのです。私たちはやがて、落ち合う場所を前もって約束するようになり、おそらくは気ままな身の上だったのでしよう、彼は必ず約束の場所に姿を現しました。何度か彼は、私の町がある緩やかな丘陵地帯のそばまで私についてきたことがありました。しかし、一緒に町までお寄りしてみないかと私が誘うと、理由は言わずにいつもきつぱりと断りました。町の北の方の森のはずれのところ、決まっています。彼は別れを告げ、私の手を握って帰って行くのです。何度か彼のことを人に問い合わせてみたのですが、それで明らかになつたことはといえば、町やその周辺に住む人々で、彼の身の上を知っている者は、一人もいないということだけでした。彼の姿を見かけたり、その風貌や仕事に目を留めた人はもちろんたくさんいました。しかし、それ以上のことは誰も教えてくれませんでした。馬や軽馬車を

使うために、彼は山の中に一軒の宿を取っていましたが、そこでも彼はただアウグストさんと呼ばれているだけでした。彼は低地の大学町からやってきた学生で、『他の学生さんたちと同じように』、『植物を研究しに』山へやって来たというのです」

「まるで足跡を残さない獲物みたいですね」と森林監督官が言うと、牧師もそれに同意した。

「私はそんな事は気にも留めず」と、クリステラー氏は話し続けた。「今までどおりの交際を続けました。山で彼に会うようになって、五回目か六回目くらいのことでした。偶然にも彼は、私の婚約者とも知り合うようになったのです。ある晴れわたった日曜日のこと、親類や知人たちと彼女は森にハイキングに出かけました。ヨハンネと私がにぎやかな一行から離れて歩いてみると、草の生い茂った小道で、私の謎に満ちた友人にばったり出くわしたのです。私たち二人は手に手を取って、彼自身はいつものように一人で歩いていただけですが、彼の顔はいつになく深刻そうに曇っていました。彼が私たち二人を目に留めたときには、もちろん彼の表情は明るく輝きましたが、それも長くは続きませんでした。彼は私たちの前で、努めて明るく、快活そうに振舞おうとはしましたが、なかなかうまくはいきませんでした。彼はとても親しげに、やさしく私の恋人に話しかけてはくれました。しかし、私たちと一緒に歩けば歩くほど、私たちが元氣よく話しかければ話しかけるほど、彼はますます黙りが

ちになりました。そしてお供の一行が、歌をうたい、笑い声を上げ、歓声を上げながら私たちに落ち合おうと、彼は突然再びどこかに行ってしまう。愉快に過ごしたあの日に、もう二度と彼の姿を見かけることはできなかつたのです。『ねえフィリップ、あの人は以前に大変な不幸に見舞われたか、今でもそれにつきまとわれているかのどちらかよ』と、あとでヨハンネは言いました。『フィリップ、あの男の人を見てみると、私はたまらなくつらい気持ちになるの。あなたは彼のそばにいて、不安になったり悲しくなったりしたこと、は、いままで一度もなかつたの』

女の人たちは、こんな問題になると非常に敏感な洞察力や感覚を持つていますから、私たち男がはつきり意識せずに感じていた多くのことを分らせてくれることがよくあります。私は一瞬たじろぎました。そういえば思い当たる節があります。確かに私の無口な友人は、今まで何度か私をたまらない気持ちにさせたことがありました。彼と一緒にいるときには、もちろん不安を感じたことなどはなかつたのです。場合によつたらこれからも時々、不安な気持ちに襲われるかもしれないということを、あの陽気な遠足の帰り道、私ははつきり意識しました。その日以来、私は友人アウグストを、以前に増して注意深く見守るようになりました。そしてあるとき一度、持てるかぎりの説得力と弁舌の才を駆使して彼に尋ねたことがあります。どこか身体の具合でも悪いのですか、ひよつとしたら、私に

も何かお役に立てることがあるのではないですか、と。私は、ぜひ勇気を奮い起こして、あなたの心を苦しめていることを全て私に打ち明けてくださいと、心の底から彼に訴えました。私の血と心は、あなたをお助けするために脈打っているようなものなのです、とも言いました。人は誰でも、このように激しく心を揺り動かされた場合には、まして自分が愛し、評価し、尊敬している相手に対してならば、真心を込めて真剣に話すべきことがあるのですが、当然私もそうしたことを付け加えました。もちろん彼はそれを笑い飛ばそうとし、きっぱりと私に言いました。自分は肉体的にも精神的にも全く健康であり、口に出して言えないような何か恥すべき行いが、自分の良心を苦しめているわけでもない。しかし、持って生まれた気質は自分でも如何ともし難く、言ってみればそれは愉快ならざる性質のもので、それが他の人の目に止まるのではないかと。さらに彼は続けました。自分は祖先から不幸な血を受け継いでおり、平凡に暮らす毎日が、一日たりとも腹立たしい、不愉快な終わり方をしないようにするには、常にその血を力づくで、注意深く押さえ込まねばならないのは確かだと。彼は彼の言うところの私の思いやり心に心から感謝しました。彼の目には涙が浮かんでいるように見えました。しかしそれは私の思い違いだったかもしれせん。ローマの貨幣に鑄出されたような彼の顔は、とてもあの時のような愁嘆場にふさわしい表情をすることはできなかつたでしょうから」

「その人はどんな面構えだったのですか、クリステラー」と、森林監督官ウレボイレは尋ねた。

「ドゥカーテン金貨に刻印された、皇帝ネロ、カラカラ、カリグラミみたいな顔でしょう」と牧師は解説した。ヴィルデマンの薬剤師はかぶりを振ったが、もうその答えに付け足す必要はないと考えたのだろう、さらに話を続けた。

「彼は私の婚約者が大変気に入りました。彼は彼女の容貌ばかりでなく、一緒にいたわずかな間に彼女が口にしたこと全てを、ことさらに褒めちぎったのです。彼女は本当に素敵な、健気な少女——実際に彼女はそれとおりだったので——だと言ひ、ため息交じりに、あの娘のような妹が自分にもいればとさ言ひました。この時とばかりに私は、巧まぬ風を装ってもう一度彼の家族について尋ねました。しかし彼は、自分は天涯孤独の身の上で、父と母はすでに亡くなり、兄弟姉妹は最初からいなかったと言ひ張るばかりです。そして話題の向きを変えようとするかのように、今度は彼の方が、私の婚礼の日取りはもう決まったのかと聞きました。

それがどんなことになっているかを彼に話すと、彼はため息をつきながらこう言ひました。『ああ、フィリップ、僕があながたを援助できれば、今日にでも結婚させてあげられるんですが——どうやって彼が私たちを援助し、そこにある名誉の椅子が、どうして三十年來空席のまま彼を待ち続けているかを、これからいよいよお

話することにしましょう」

第五章

薬局ヴィルデマンの、絵がたくさん飾られた奥の小部屋に会した一同は、テーブルに身を乗り出した。この親しい友人がかなりの話し上手であることは、彼らも知っていた。しかし、彼が今日ほどの才能を発揮したことはなかった。森林監督官ウレボイレのパイプの火は消えてしまい、妹のドレッテは兄の手をしっかりと握り締めていた。土地の牧師は、嗅ぎ煙草入れでテーブルを静かに叩きながら言った。

「やっとの事で、というわけですな。柔らかいクッションの肘掛け椅子、なんの変哲もないこんな家具が、三十年ものあいだ人を焦らし続けることができるなんて、誰も信じちゃくれないでしょう。しかしクリステラー、実際にこの椅子は、私を三十年も前から焦らし続けてきたんですよ」

気持ち張りが詰めていたにもかかわらず、一同は声を出して笑った。フィリップ氏も一緒に笑い、そして物語を続けた。

「夏は去り、秋がやってきました。九月になり、十月になり、とうとうこの年も自然の華やかさや豊かさが衰え始める時期になったのです。私の親方は、彼岸の嵐が訪れるこの時期になると、きまっ

て顔面の痛みに悩まされたものですから、以前に増して私を調剤室に縛りつけざるを得なくなりました。彼が再び私を野に送り出してくれたのは、かれこれひと月ばかり経ってからのことです。十月の十五日に、私は三マイルほど離れた『血の椅子』と呼ば慣わされている有名な岩盤地帯に行くように命じられました。この時期に、その場所だけで開花する苔があったのです。

その時は確かに私は血の椅子に登りました。しかしその後は一度も行ったことはありません。私はその荒涼とした場所にある種の恐れのおかけで、私はこうしてこの家を手に入れ、今のような生活を送ることができなくなりました。謎は未だに解き明かされないままです。親愛なる皆さんが、後でこの謎に挑んで、ご自分の頭のキレをお試しになるのも一興でしょう。私はいえ、まるまる一世代の間、余儀なくその謎解きに思い煩わされたあげく、すっかりそれも諦めてしまいました。ここにお集まりのどなたかが、最後に正しい答えを見つけようと見つけまいと、今の私にはどうでもよいことです。しかしあの日、私にとって非常に重要な意味を持つ十月十五日の出来事については、今から細大漏らさず、できる限り詳しくお話しますが、皆さんにもきつとそれでご満足いただけましょう」

「うさぎは後ろ足で立って聞き耳をたてるといいますが、どんなうさぎだって今の私ほど物見高くはないでしょう」と、森林監督官

は言った。

「いやはや、なんという晩でしょうな」と牧師は言った。「まったく、この嵐の音ときたら。いや、お続けください、どうぞ先をお話しください」

実際のところ、ほんとうにすごい嵐の夜だった。夜が深まるにつれて、北からの風がよいよ激しく山脈に打ちつけて、ヴィルデマンの薬局もまともにその余波をこうむった。

「あの日は今日のような天気ではありませんでした」フィリップ氏は普段と変わらぬ調子で、冷静に落ち着き払ってこう言った。一つの体験を長きにわたってじっくりと考え抜いてきた人のするよう。しかし、彼の話は再び中断された。お客が一グロツシエン分の苦味塩を買いにやってくる、店の主人に一五分ほど使用目的を説明したのである。——どっちにしたって、そんなことは明日でもよからうと、不満げに呟いたのはウレボイレである。しかし妹は、この小休止を利用して、テーブル上の陶磁の深皿をあらためて一杯にした。そしていよいよ一同は、薬剤師クリステラーが十月十五日のあの日に体験したことを聞く段取りが整った。

「朝の九時頃、朝食をカバンに入れ、胸乱を背に負って、私は親方から命じられた仕事を果たすべく店を出発しました。ちなみに店の屋号は『ダビデ王』といいました。風の静かな、濃い霧の立ち込めた日でしたが、私はひどく打ちひしがれた、落ち込んだ気分でした。

た。たとえ願ってもない上天気だったとしても、私は憂鬱に歩を進めざるを得なかったとは思いますが、もちろんそれには訳がありました。前の晩私は、ヨハンネのおじさんから、ほんのひと時、家を訪ねてはくれまいかと請われたのです。訪ねてみると、おじさんのもてなしは二時間にも及びました。二時間の間、彼は私に切々と言い聞かせました。そろそろあなたも分別というものを持って、自分の将来設計をはっきりさせたらどうか、と言うのです。そして彼の姪を不幸にすることだけはまかりならんとも言いました。手短かに申しましょう、私の婚約者との約束はなかったことにして、そのかわり彼の、つまりはおじさんの変わらぬ友情と好意を信じてほしいというのです。あの人の言うことは何もかも筋が通っていました。しかも彼の話ぶりには、思慮深さばかりでなく人柄の良さにもじみ出ていました。みじんも高ぶることもなく、怒りをあらわにするでもなく、彼は自分の、そして世間の意見というものを語りました。なにも私に不満な点があるというのではない、それどころか、彼にとつて私は本当に好ましくもあり親しみも感じている、だけどね、というわけです。私はどうかこうにか家にとどり着きました。あるいはよろめき歩いたといったほうが正しいかもしれません。そのままベッドの前の椅子に座り、両手で頭を抱えながら夜を明かしました。あの思慮深い説得のおかげで、全てに意気消沈し、じっくり思いをめぐらすことも、筋道を立てて考えることもできませんでし

た。それに私は、かわいそうな愛しいヨハンネも、あの晩泣き明かしたことを知っていました。朝の五時頃、やはり不眠症に悩まされていた私の親方が、ランプを手に私の部屋の入り口にやってきました。彼は自分の新たな希望を語り、その日の指示を私に与えたのですが、ふぬけのようになっていた私は、彼の言っていることがほとんど理解できませんでした。ようやくのことで私が事情を飲み込むと、彼は包帯を巻いた頭を振りながら、いままいしげに出て行きませんでした。そして、ドアの敷居のところで聞こえよがしに呟くのが聞こえました。

『あの男、またしてもお頭がどうにかなりおったわい』

『あの娘のために誠実で心のこもった手紙を一通書いてもらえまいか。必要最小限のことに少しだけ色をつけてくれればよろしい。私がそれを手渡ししましょう。もちろん私も率直に私の考えを言ってみるつもりです。悲しみは時が解決してくれます。あなたご自身もこの上なく惨めな気持ちになるでしょうが、それも時間の経過に委ねるのが一番です。そうすればきっと全てがうまくいくでしょう』

おじさんは、前の晩のありがたいお説教の終わりにこう忠告してくれました。そんな時にまともでいると言うほうが、無理な話でしょう。こんな事情があったものですから、薬局『ダビデ王』とあのおじさんと私の婚約者の家から三マイル離れた所に咲き誇った苔の花は、私にとって本当にこの世でただ一つの救いでした。とにかくそ

こまで歩いて行って、苔を探さなければならなかったわけですから。私と哀れなあの娘にとって、少なくとも一日の時間稼ぎができたわけです。人間というものは、苦しい時にはたったの一日、たったの一時間、たったの一分間にすらしがみつこうとするものです。どんな形であれ、誰もが一度は経験することではあります。

当然ながら、私はヨハンネの窓の下をこっそり通り過ぎてみました。あの娘の姿は見えませんが、おじさんの姿は目にとまりました。彼はパイプをくわえながら窓の向こう側に立って、寒暖計を眺めている様子でした。彼自身の体温は昨日の夜から変わっていないらしく、慇懃にナイトキャップを取って、人差し指を立てて見せました。この身振りはこう解釈する以外にありませんでした。お忘れになってはいけませんよ、あなた、私が昨日申し上げたことを。私は決して譲るつもりはありませんし、われわれ全員にとって何が良いのかも知っているつもりです。——私とてだてに年をとっちゃいませんし、あなた方のような、無邪気な、若い、考えなしの青年よりは、少しばかり詳しく世間でものを知っていますので。——私のほうも、いままでどんな人間に対してもしたことがないほど慇懃に、恭しく挨拶を返しました。こうして私は、秋の朝特有の灰色のもやの中を、ぼんやりとため息をつきながら、重い足取りで歩いていきました。

『ああ、このせち辛い世の中は、なんと荆棘の多きこと』とは、

イギリスの詩人シェークスピアが、自分の戯曲の登場人物に言わせているセリフです。私はこの詩人が好きで、いつも読んでいます。翻訳を一冊持っていて、その中にはいろんな箇所アンダーラインが引いてあります。あの時には『荊棘』と『この世』のセリフが心にしっくりとしましたので、山への道すがらこのセリフを幾度となく反芻しました。実際、いまや私の四方見渡す限りには、荊棘の藪がびっしりと生い茂っていたも同然でした。そもそもこの世の中というものは、浅ましくもあれば、大抵は涙に満ちあふれているのだということを、足下の大地と頭上の天空が私に証明してくれたのでした。

谷間を過ぎてしまうと、そこにとどまっていた霧からは抜け出すことができず。しかし、私の胸に淀んだ濁りは、日の光にあふれた頂上までつきまとってきました。私は歩みを速めました。何度か冷たい沢の水にハンカチを浸して、熱くなった徹夜あけの額と、熱を帯びたこめかみにそれを押し付けました。私はまわりを見回すことはしませんでした。美しい風景や、荘厳な崇高な眺めが、不幸せな、あるいは悩みや不安に打ちひしがれた人間にとつては、救いの糧とも治癒の糧ともなるとはよく言われます。しかしそれは、何かの思い違いか、そうでなければ真つ赤な嘘です。そんなことは絶対ではありません。

ほんとはその逆で、苦悩に満ちた、苦痛を負わされた人間にとつ

ては、陽の光に照らし出された山の頂上からの遙かな眺め、様々な魅力的な色合いに輝きわたる、大地の遙かな眺めほど厭わしく思えるものはありません。それは本当に不幸なこと、空恐ろしいことですらあるのですが、しかし実際にそのとおりなのです。気分が優れない時の嵐や雨はまだしも我慢ができます。しかし自然の美しさは、自分に対する嘲りや侮辱とを考えてしまい、天地創造の七日間をのり始めさせますのです」

牧師はここで気遣わしげに頭を振った。ドレット・クリステラー嬢は確かにうなずきはしたが、やはりひどく気遣わしげな不安げな様子だった。しかし森林監督官ウレボイレは、パイプでテーブルをたたきながら叫んだ。

「まさにそのとおり、確かに一理ありますな。よくよく考えてみれば、ますます思い当たる節があります。弱りきった奴ら、つまりは昔の鉄砲傷や病気で衰弱した獣のことですが、奴らだって天地創造の壮麗さにはもう一切かわりを持つとはしません。健康な時にはどんなにそれに親しみを感じ、どんなにそこから恵を受けていようともです。動物を相手にしている人なら誰だって、大地や水や光や空気に関するあらゆる事柄で、奴らと人間との間にほとんど違いがないってことを知っています。その時のあなたはまさしく手負いの獣だったわけですな、クリステラー。おじさんの撃った弾は見事にあなたに命中した。やがて他の獣の場合と同じように、運命とい

う犬がやってきて、死んだあなたをみつけては盛んに吠え立てると
いうわけです」

「黙って先を聞きましょう」と牧師は言い、一同は再び耳をかた
むけた。

「勝手の知った土地ではめつたに起きないような事を、私はあの
とき経験しなければなりませんでした。つまり私は一度ならず道に
迷い、その度ごとにやつの思いで本道を見つげ出すというありさ
まだつたのです。人生に対する混乱した思いと、途方に暮れた思い
が、私の内と同様、外にもあったという事なのでしょう。私の行く
べき小道は、さらに上へ上へと続いていましたが、しかし幸いにも
私は、時計の下げ紐にコンパスをぶら下げていました。こうして私
はブナの林を曲がりくねって突き進み、縦の森林帯に入りました。
風変わりな太古の花崗岩が崩れ落ちてきて、本当に不気味な地形を
なしている急斜面を、さらに斜めに登っていきました。そして木の
全く生えていない平坦地、やはりごっこつした、奇怪に重なりあつ
た岩塊に覆われた平坦地を過ぎるころになると、霧の中からやつと
太陽の光が顔をのぞかせました。正午の太陽は、秋晴れにふさわし
く光り輝いていました。私は自分が登ってきた道や谷間を振り返り
ながら一息つききました。霧は一日じゅう谷間に立ちこめていまし
ますが、私が休息を終えてさらに先に歩き出した時には、再び音もな
く私の背後に忍びよってきました。そして、今回親方が私を送り出し

たあの有名な場所が目の前に見えだすころになると、再び私は霧に
追いつかれてしまいました。しかし、それはもう低地に立ちこめる
濃密なもやではなく、すべてを魔法の布で包み込んでしまうような、
軽やかな霞でしかありませんでした。道を曲がったところで、表現
しようもないほどグロテスクに割れ目の入った岩盤の塊、——つ
まり血の椅子——が姿をあらわしました。私は縦の木の茂みを抜
け出して、六十フィートから八十フィートもあるその平坦な頂上を
見上げました。私は短い草の生えた地面を、ゆつくりと、四苦八苦
しながら登っていきました。そして、岩盤のたもとで一息ついて、
目指す希少な地衣類を探すための力を蓄えたのです。

ウレボイレさん、あなたなら血の椅子をご存知でしょう。それは
幾つかの石の積み木でできた迷路のようなもので、山頂の平坦地の
かなりの部分を占めています。岩石群の多くには不思議な伝説めい
た名前が付いており、一番高いところへは、磨り減った石の階段で
よじ登る事ができます。そして岩盤全体は、この一番高い岩石群の
名前を使って命名されているのです。我々の民族の太古の異教時代
に、生贄を捧げる祭壇として使われたためにあの名がついたらしい
のですが、それもさもありなんとかわるを得ません。

気分はとても憂鬱だったにもかかわらず、何よりもまず私は、持
参してきた弁当を旺盛な食欲でたいらげました。それから与えられ
た課題に取り組んだのですが、なかなか容易にはかどりませんで

した。私の親方が新鮮なままの標本で手に入れたいと願っていた、ちっぽけな、地にへばりついたあの植物は、血の椅子のどんな割れ目にも生えてはいませんでした。それに加えて、前の晩の出来事や、眠れぬ一夜に見た様々な幻想や、朝に出会った三角帽姿のおじさんの姿が、ぼやけたまなこに浮かんできたものですから、これもまた搜索の著しい妨げになりました。

こうして私は、岩の間をあちこちよじ登り、這いずり回りましたが、目指す地衣類は見つかりませんでした。しかし、私は別のものを見つけたのです、つまりは財産を」

「えっ」薬局ヴィルデマンの裏の小部屋に集まった聴衆は、こう叫んだ。

「成果のあがらない仕事でヘトヘトに疲れ果てた私は、とうとう先にお話しした一番高い岩塊、つまりは本来祭壇として使われていたあの岩石群の基底部のところまで登ってきていました。すると突然、多分反対の側から大急ぎで登ってきたのでしよう、頂上に一人の人間が姿を現し、叫び声をあげたのです。私は仰天して思わず後ずさりしました。周りのものすべてと同様、薄い霞のヴェールがかかっていましたが、その姿は、腕を高く突き上げて、両手で髪の毛をかきむしりました。そしてふたたび叫び声を上げながら、最初は膝にくずおれ、次にはすっかり地にひれ伏してしまいました。私は立ち上がり、震えながらすぐそばにあった花崗岩の塊にしがみつき

ましたが、我を取り戻すまでにはしばらく時間がかかりました。ようやくのこと一つ疑問が浮かんできました。あれは何だ、という疑問が。

さよう、あれは一体何だったのでしょうか。そもそも何かでありえたのでしょうか。一人の酔っ払いか。気の狂った人かそれとも癩癩病みか。あるいは生きることに疲れた不幸な人が、この場所を選んでやってきて、今から自分の人生に終止符を打とうとしているのか。こんな思いが、一瞬のうちに次から次へと私の脳裏をかすめていきました。しかし、生贄の崖の頂上からは何の答えも返ってきませんでした。

どうしてもあれが一体何者なのか確かめなくちゃならん、それがお前の義務だぞ、と心の中で声がありました。唇を堅く結び、歯をしっかりと食いしばって、私は勇気を奮い起こしました。万が一に攻撃された場合の用心に、ストックを固く握りしめ、我々の祖先たちの聖なる生贄の場に続く石段を、ゆっくりと注意深く登っていききました。おそろおそろ慎重に、顎を平坦地の上に出してみると、あの男がそこに倒れていました。——不幸な男はピクリとも動かず、顔を石に押し付けたまま長々と横たわっていました。私は大急ぎで駆け登って、そばに歩み寄り、男の肩をつかんで話しかけました。間もなく男は顔をあげ、私をじっと見つめました。

私はあやうく叫び声をあげそうになりました。この男がさきほど

したのと同じように。それは私の仲間、私の謎に満ちた友人、私の植物学研究の同僚ではありませんか。しかもその表情は恐ろしく荒んでおり、苦痛や不安や怒りのためにひどく歪められておりましたが、その有様はとも言葉でお伝えできないくらいです。

ゆつくりと、ほんとうにまるで癲癇の状態から身を起すかのようには彼は立ち上がり、私を呆然と、一言も発せずに見つめました。しかしやがて、場所や時間や状況についての意識が徐々に戻ってきました。

『フィリップ』と彼は気抜けしたように言いました。

『おお、アウグスト』と私は叫びました。

『あなたでしたか、あなたがここで私を見つけてくれたんですか』

『いやほんとうに、一体どうしたんですか、一体何が起きたんですか。喜んでお力になりますよ』

『そんな必要は全くありません。お願いですから、見つけた時の姿のまま私を放り出して、あなたは一人でお帰りください。私はもう、どんな人とも交際する資格のない人間なのです』

彼はこれらのこと全てを、とても理性的に、落ち着いて慎重に話しましたので、なおのこと彼の取り乱しぶりが、痛切に私の胸にこたえました。私が彼の手を握ろうとすると、彼は素早く怒ったように自分の手を引っ込めて、こう叫びました。

『そうじゃない、そうじゃない、もうおしまいなんです、クリス

テラーさん。私は今日この手で、自分の運命に封をしてしまったんです。ですから私は、もうどなたにも友情や尊敬や愛情の印に、この手を差し出すことはできません。どうか私が愚か者になったとは思わないでください。——ああ、愚か者になれたらどんなにいいか。

でも私はそうではないのです。この三日間、私は願いつづけていました。私の心をあなた方の世界——あなた方の日常の世界に結び付けている最後の糸が切れてしまえばいいと。原生林でよく、道に迷った哀れな人間が発見されることがあるでしょう。そんなふうに誰かが私を見つけてくれはしないかと。フィリップ、あなたのお顔ほど、今日の私の心の慰めになったものはありません。しかし、あなたに手を差し出すことはどうしてもできないのです。周りを見回してごらんさい、たくさんの町や村が点々と見えるでしょう。しかし、もう今からの私にとっては、あの数知れない人間の住居に近づく道は、完全に閉ざされてしまいました。私は、あなた方とはもうお付き合いすることはできない、私は一人ぼっちなのです。もうこの世には、今の私ほど孤独な人間はいないのです』

『でも、私がここにいますよ。運命がちょうどの時間に私がここに来るように導いてくれたわけではありませんか。私は、私の婚約者、愛しいあの娘を失ってしまいました。あるいは、無理やり私から取り上げられたと言ってもいいでしょう。私にとっても世界は閉ざされてしまったのです。ですから、お互いに慰め合い、励まし合

おうではありませんか』

彼は心の奥底で、恐ろしく手強い敵と格闘しているように見え
ました。やがて彼は相手を打ち負かし、地に横たわった敵の胸を、凱
歌をあげながら足で踏みつけにしたかのようでした。彼は歯をきし
ませて右手をこすりました。まるでそれが濡れていて、乾かさねば
ならないと思っているかのように。最後に彼は私を鋭く、冷ややか
に見つめながら静かに話しました。

『よろしいですか、あなたはどんなにしたらって私の役に立つてく
れることはできません。お願いですから、そんな努力をするのはお
やめください。クリステラー、あなたもご存じのように、私は今ま
での人生で自分の考え以外のことを口にしたことはありません。今
日のこの気違い沙汰にしても、それなりに筋は通っているのです。
私はちゃんとした意図をもって、この冷たく硬い石の上に身を投げ
出しました。私の心の血液は、この溝を流れて下に流れていきまし
た。かつてカール大帝が招集したフランク人の兵隊たちが、捕虜と
してここで血を流したのと同じように。とにかく私はひとりぼっち
です。そしてそうありたいと願うのです。どうか立ち去ってください
。私に対するあなたのお気持ち、あなたの優しい思いやりはじゅ
うぶんに理解しています。ですから私たちは、お互いに思い出の中
で信頼を抱きあいましょ。——お元気で、フィリップ・クリ
ステラー』

その言い方は、ひどく冷徹で不快ですらありました。しかし私と
て人間の心理というものをよく心得ていましたから、この口調が全
く別の心の揺れから溢れ出てきたものだということを知っていまし
た。それゆえ、自分可愛いさから一方的に、この不幸な人に有罪を
宣告することはできませんでした。つまり、慇懃に別れを告げて、
腹を立てつつさつさと家路につくというわけにはいかなかったのだ
す。

『私たちがどうしてもここで永久に別れなければならぬなら、
それも致し方ありません』と私は言いました。『しかし、なぜ私た
ちはこんなかたちで別れなければならないのですか』

相手の目からは涙があふれ出てきました。

『わかっています、わかっています』と彼はすすり泣きました。『あ
なたのおっしゃるとおりです。決してふさわしい別れ方ではありま
せん』

彼は私の首に手を回し、口づけをしましたが、どうしても私から
別れたくない様子でした。

『お元気で、優しい方。私のことは全て忘れてください、私の
この不幸を除いては。私のことはもう振り返らないでください。後
で一度、お便りを差し上げます。フィリップ、お元気で、さような
ら』

こうして私たちは長いこと抱き合っていました。やがては実際

に別れを告げることになりました。それ以来彼とは一度も会っていません。しかし、彼からは一度だけ連絡がありました。——彼は手紙を一通書いてきたのですが、それから三十年、ずっと私は薬局ヴィルデマンの主としてやってきたのです」

第六章

牧師と森林監督官は、椅子の背にもたれかかって天井を見つめていた。妹は膝の上に手を組み合わせて、兄の方を見上げた。嵐の風がひとしきり吹き渡るのがはっきり聞こえた。一同は長いこと黙りこくっていたが、何かを言わなくてはと思ったのだろう、森林監督官が口を開いた。

「血の椅子あたりでも、今頃はヒューヒュー、ゴーゴーの大荒れだろう」さらに彼は唐突にこう付け加えた。

「三十年とはずいぶん長い時間ですな」

「全くです」と牧師は言った。そして、物思いに沈んだ主人の方に向き直って、こう尋ねた。

「その人物の職業や本当の名前は、まったく見当がつかないのですか」

「皆さん、ちょっと失礼しますよ」フィリップ・クリステラー氏はこう答えて、この晩これを最後に、もう一度調剤室の文書箱を開

けるために部屋を出て行った。彼は大きな筒を携えて戻ってきたのだが、そこにはたった一通の手紙しか入っていないかった。そしていくつかの消印が押しであり、五つに砕けた封蠟に覆われた封筒は森林監督官ウレボイレに、手紙の方は牧師シェンランクに手渡し、自らはゆっくりと腰を下ろした。目の前に手をかざして、パイプにあらためて火をつけると、この書類に友人たちがどんな反応を示すのか、静かに待った。

「内容——国債の証券で九千五百ターラー」と、森林監督官は口ごもった。「無償で——フィリップ・クリステラー氏へ——」

「実に驚きだ」牧師は牧師で、添書にざっと目を通しながらこう叫んだ。「全くこれは風変わりな手紙、謎めいた、ミステリアスな郵便ですな」

「ええいつ、じれったい、早く声を出して読んでくださいよ」森林監督官がこう叫ぶと、牧師は読み上げた。

「人生を最初からやり直そうと心に決めた一人の男が、ここで自分に負わされたこの上なく不愉快な荷物を降ろし、友人に同封した額のお金を贈呈するものとする。この人物はやがて姿をくらまし、何の手がかりも残さないから、探そうとしても無駄であり、そうする必要もない。ああ、フィリップとヨハンネ、これを受け取ってください。どうせこの男が持っているも、それは彼を奈落の底に引きずり落とすだけなのだから。幸福な、元気のいい子供たちが成長す

るのを見守ってくれるような、しっかりとした家をお建てなさい。さようなら、親切な方たち、——お元気で、ごきげんよう、フィリップ・クリステラー——人間に復帰するための道すがら
血の椅子の愚か者より

一八三一年十月三十日、ハンブルクにて」

牧師は黙って手紙をテーブルに置き、ウレボイレはテーブルをどしんと叩いた。食器が一斉に跳ね上がり、コップは互いにおつかつて、鋭く不気味に鳴り響いた。

「これはたまげた、だつてそうでしょう、そんな『ごきげんよう』なら私だつて大歓迎だ」

「そして当時のあなたは、この書類を手にしてもなお、これらすべてが夢物語だと思つていたのですね」

「何日間も、何週間も私は夢遊病者のようにうろつき回りました。手紙ばかりでなく、お金も手に持つて。しかもそれらはみな、掛け値なしの国債証書か様々な国の地方債券でした。それらは一夜にして黄色いゴボウの葉っぱに変わることもありませんでしたし、私の鼻先で気味の悪い煙になつて消えてしまったわけでもないのです。それらは本物で、それぞれ債券として通用しました。銀行家たちは、喜んで換金するなり両替するなりいたしましたしようと申し出ました。しかし私は、それらを手紙と一緒に婚約者のところに持つていき、これらすべてのことにどう対処したものか尋ねました。——さし

あたり私は、親切なおじさんのところへはありがたい御意見を聞きに行かなかつたのです。

ヨハンネも、もちろん最初はある種の驚きを隠しませんでした。やがて彼女は、理路整然と落ちて着いて自分の意見を述べました。私はそれに従つたのです。

『私はあなたのお友達と一緒にいるだけで、たまらない気持ちになり、不安を感じさせましたわ。でもそれは、たとえば彼が悪い人だとか、よこしまな人だとかいう恐怖感ではなかつた。私は彼にとても同情していたし、不幸から救つてあげられるのなら、喜んでお手伝いしたいと思つていたの。でもフィリップ、この人はいつも正確に考え抜いていて、自分の言うことやすることをちゃんと知り尽くしている、私はいつも彼からそんな印象を受けていたわ。あの人は、たとえ気分が憂うつな時でも、明晰な賢い頭脳を持つている。だから今回のことがどんなに奇妙なことに思えても、ほとんど狂気の沙汰に見えても、きつと彼は前もつて考え尽くし、準備を整えていたのだわ。きつとそれが、彼の考え出した自分にとつての最善の方法だつたのよ。あなたはお金を受け取つてかまわない、その上にあなたの幸運を築き上げてみてもかまわないと思うわ。私たちはそれを貸付金だと考えて管理しましょう、フィリップ。私たちは、送り主のための椅子を毎日テーブルに用意しましょう、いつも彼のために一番いい席をとつておきましょう。そして毎日毎日、彼が来てくれ

るのを二人で待ちましようよ。おじさんにはどこからか遺産が入ったということにしておけばいいわ。今からすぐにでも彼にそう言つてちょうだい。やむを得ない場合のささやかな嘘ですもの、私の良心は痛まないわ』

お分かりますか、皆さん。これが、いつも座る主のないままそこに置かれた椅子のいわれです。これが三十一年もの間、常に私どものテーブルの席が、一つ空いたままになっていることの理由です。しかしあの友人は、今日まで一度も戻つては来なかつた。こちらにやつて来てからの私の生活は、皆さん方がご存知です。ご承知のように、私は以前二度も倒産したことのあるこの薬局を引き継ぎました。この職業は、私の前任者たちにとっては、この上なく危険なものだったので、私は四苦八苦しながらも、なんとか今日までやり通すことができたのです。しかし皆さんも知つてのとおり——」

「あなたは、ある大変な苦痛を耐え忍ばなければならなかつた、そうでしょう、お兄さん」と、年老いた妹は激しく心を揺り動かされて叫んだ。「もちろんそのことは、誰でも聞いたことがありますわ。でも、本当の事情を知っている人は誰もいなかったのですね」

「本当にそれは痛ましいことでした、ミセス・クリステラー」と牧師は言った。そしてウレボイレは、深いため息をついてつぶやいた。

「全くそのとおり。しかしフィリップ、飲もうと思つていた水を、

そんなふうにはコップごと口元から奪われた人は、あなたが最初じゃないでしようからな」

「家は建ちました。しかし婚約者、若い奥さんはその家に住むことはできませんでした。彼女は結婚式に定められた日に亡くなったのです。そして私が、彼女の代わりにかわいそうな兄の家政を取り仕切つてきたのです。一世代に相当する、三十年の長きにわたつて。その間の出来事については、今日この嵐の晩に、もう十分に語り尽くされてきたのですが」

「そして私たちは、平凡な毎日でしたが、今まで幸せに暮らしてきました」ヴァイルデマンの薬剤師は、悲しそうに微笑みながら言つた。「私たちは平安のうちに髪も白くなり、窓の前をざわざわと通り過ぎてゆく嵐でさえ、もう私たちを苦しめることはありません。空いたその椅子は今でも主がいませんが、そこに座るべき人は、きつとどこか他の、遠い異国の地に安らぎを見いだしていることでしょう。望むらくはその乱暴な手紙に書いてあるように、再び人間に戻つた後で。しかし私たち、この地で老いてきた私たちは、お互いに信頼と好意を寄せ合いながら、もう少しこうしてお話を続けましょう。重苦しい気分を、次にお会いする時までお互い持ち越さないために」

「そろしましよう」と、二人の男は声を揃えて言った。

「もちろんそれがいいわ」と、妹も声をあわせた。

付記 本稿は十九世紀後半ドイツの小説家ウィルヘルム・ラーベ (Wilhelm Raabe 一八三一―一九一〇) の作品 *Zum Wilden Mann* (一八七四、邦題『薬局ウィルデマン』) の、第四章から第六章までの翻訳である。第一章から第三章まで翻訳は、本誌第一四五号に掲載済みである。また、残りの第七章から第十六章までについては、逐次本誌に掲載する予定である。底本は以下の通り。Wilhelm Raabe *Sämtliche Werke, Braunschweiger Ausgabe, 11. Bd., 1973, Göttingen, S. 159-256.*